

## 「2022年度国立台湾大学スプリングスクール派遣参加報告書」

京都大学文学部2年 橋本充史

この度、実際に台湾に行き現地で学生としての生活を経験することで、日本では見聞することがなかったであろう当地の中国語に多く触れることができた。教科書や参考書に載る中国語は、自らの学習における拠り所として欠かせないが、実際に言語を運用していくためにはそれだけでは不十分だということが、身をもって理解できた。台湾人との会話に於いては、必ずしも学校文法・語法の原則に依拠しない話し方に触れられた以外にも、反り舌音の区別が曖昧な台湾人の中国語の聞き取りに想像以上に苦労したり、店で閩南語らしき言語が交じった中国語で話しかけられるも日本漢字音の知識を活かして何となく理解できてしまったりと興味深い体験が多かった。そのような中、地下鉄等の交通や各種施設、飲食店等において、少しでも中国語を日本語や英語の翻訳を頼りにせずに理解しようと努め、それが結果的に中国語運用能力の向上に些か寄与したように思う。無論、現地の人々の中国語が理解できず、絶望したことがなかった訳ではないが、会話がある程度上手くいった際は達成感が得られ、更に中国語の学習意欲を得た。また、台湾では台湾出身の友人とも親睦を深めることができた。具体的な内容は公開できないが、大学外で台湾人と交流した体験の蓄積が日台友好に微力ながらも貢献していれば嬉しいと思った。プログラム内での授業では、日本での授業では不足を感じていた、聞く・話す能力の向上に自ら重点を置いて取り組んだ。授業の難易度は高く、中国語で咄嗟に反応できなかつたり、同学の中国語が理解できなかつたりと実力不足を多々感じたが、周りの学生に刺戟を受けながら勉学に励むことができた。三週間の授業を通じては、特に聞く能力について進歩を感じている。依然として街中では中国語が聞き取れないことも多いが、留学前に比べれば、漢字の視覚的な情報に頼りすぎることなく中国語が理解できる割合が高まってきたように思う。

また、周りの日本人含む留学生と授業外でも中国語を用いて会話するという経験は、今回のように志を同じくする学生が集まる時でなければ不可能であり、とても貴重な時間であった。今後は、京都大学において、中国語学中国文学専攻の学生として中国語に関わる授業を受講するほか、台湾や中国の短期・長期留学を前向きに検討するなどして、中国語学習の機会を継続して最大限利用したいと思う。特に、国立台湾大学との交換留学については強く関心を持っているところである。また、本留学課程を通じて多くの現地の学生に助けて頂いたという恩を記憶に留め、京都大学内の留学生と以前に増して積極的に交流し、その中で中国語を練習する機会を探していきたいと思う。最後に、今回の留学を通じて、所謂世界共通語は英語であると感じる場面が多々あった。学士の四年間の後に就職、進学のいずれを選ぶのかはまだ決めかねているが、どのような進路を選択するにせよ中国語のみならず英語をも習得する必要があると痛感している。今後の課題としたい。